

中津街道

令和五年

旅案内



小倉城

常盤橋

中津口

湯川

曽根

裡山

コロナ禍4度目となる令和5年(2023)の春も幕を開けました。ようやく、人々の往来も旅の楽しみも戻りつつある今日この頃。
平成28年(2016)4月に東九州自動車道が京築地域内で全線開通して、もうすぐ8年目の春を迎えます。
今年こそ、もっと楽しく旅することが出来る年であることを願い「中津街道」を取り上げることになりました。
さあ、読者の皆さん、一緒に中津街道を歩いてみませんか？



松山城

苅田

行事

大橋

高瀬

椎田

松江

宇島

吉富

中津城

小倉橋



菱屋平七

江戸時代、中津街道と呼ばれたこの街道は、小倉の常盤橋を起点に中津城下へと至る交通の要衝で、北九州市小倉北区には中津口、かたや大分県中津市には小倉橋という地名が今も残っています。もっと、古くは宇佐大路と呼ばれ、都からの勅使が宇佐神宮へと参向する官道として、道鏡事件の際には、和氣清麻呂が宇佐神宮へ御託宣を求めて辿った道でもありました。

その後、寛永3年(1626)、細川忠興・忠利

親子によって街道の整備が行われ、一里塚が設

置され桜が植えられました。その様子は正保4年(1647)に描かれた所謂「正保絵図」に見ることが出来ます。また、郡界には郡界石、街道の主要な分岐点には道標が設置され、そのいくつかは今も当時のまま街道沿いに残されています。こうした面影を辿っていきましょう。





小倉中津口を出て、小笠原藩の菩提寺広壽山福聚寺がある足立山に沿って山麓をしばらく進むと和気清麻呂が入湯したという伝説が残る湯川です。清麻呂ゆかりの葛原神社を経て、竹馬川にかかる唐戸橋を渡るとかつての宿場町、曾根です。曾根から朽網への街道は「千間土手」と呼ばれ、元和元年(1615)藩主細川忠興が新田開発を行うために作った沖土手が残されています。朽網の先のなだらかな坂は、狸山という地名が残る峠で、応永年間や豊長戦争で激しい攻防が繰り返された古戦場です。その先には郡界石が今も残され「是從東京都」「是從西企救郡」と記されています。

いよいよ苅田町へと入ると、神田町から京町、富久町へと続く区間には比較的当時の街並みが残されています。海に浮かぶ海城の如き威容を誇る松山城は、黒田官兵衛が九州上陸の足掛かりとして入城したことが知られています。また、現在の苅田町与原の海岸沿いの多くは明治以降の埋め立てによるもので、戦前までは製塩が盛んでした。その名残として宮城県塩釜市から勧請されたという塩竈神社が建立され、街道は東に海岸線を見ながら中津へと続いていました。

また、石塚山古墳、御所山古墳など、古代、この地域が

海上交通の要衝として大和王権と深いつながりを持っていたことを示す巨大古墳が今も残っています。

小波瀬川を渡ると行橋市行事です。江戸時代に尾張の商人、菱屋平七が享和二年(1802)に記した「筑紫紀行」によると当時の行事村、大橋村がにぎわっていた、農家漁者二百軒、家三百軒、酒造で大いに儲けていることや、大橋村の中ほどに京都郡、仲津郡の郡界石があること、今川という川があり、高瀬村には茶屋が三、四軒あったことなど、中津街道随一の在郷町として賑わう様子が書かれています。

築上郡に入ると宿場町の街道沿いに一帯を統括する郡屋があり、椎田には「英彦九里、宇佐九里、小倉九里」という言葉がある通り、小倉く宇佐の中間点でした。この地に伝えられる「延塚奉行」の逸話は、年貢に苦しむ農民を救った名奉行の功績を今に伝え、その遺徳をしのぶ供養は今も行われています。

さて、綱敷天満宮の梅の香りに癒されて、街道の旅はいよいよ終盤。松江は漁村を中心とした在郷町で、造り酒屋や宿屋などもありました。現在もその街並みをよく残していて、古く神功皇后伝説に縁の「お腰かけ」は道の駅の名称として現代によみがえっています。明治30年(1897)に豊州鉄道(現日豊線)が開業した折には豊前松江駅が設けられ、駅舎は今も古の情景を伝えています。また、程近い街道筋には「從是東上毛郡」「從是西築城郡」と記された郡界石が保存されています。

この先、街道は海側(八屋)を通る下往還と、宇佐大路(勅使街道)に沿った上往還に分かれます。

前述の「筑紫紀行」では、八屋村を「人家三百軒計(ばかり)、塩浜湊、町屋きたなげ、宿屋茶屋もなくうどん屋一軒」と菱屋平七は記しています。「筑紫紀行」より七年

前の寛政7年(1795)「上毛郡村々明細帳」では、八屋村と浦とで比較すると家数百六十八軒、馬二十四、酒造屋五人などであり、八屋浦は家数百三十五軒で家数の合計は三百三軒で符合します。浦に商人、八屋に五人の酒造屋がいて、宿駅、問屋、紙屋などがあつたと記されています。

吉富町には「御界川」という小さな川があり、ここが小倉藩と中津藩の藩界でした。近くの民家には「從是西小倉領」の標柱があり、その先の山国川を渡るといよいよ中津城下となります。山国川に橋がかかったのは、明治37年(1904)で、小犬丸の対岸の堤防には渡し場跡の看板が掲げられています。

小倉中津口を出て48km余り、当時の里程で十二里の旅は中津小倉口で二つの城下町を結んで終わります。

※新春の中津街道の旅いかがでしたか。街道の名所旧跡は、「京築かるた」にも詠まれています。合わせてお楽しみください。



●参考文献

『小倉と中津を結ぶ豊前の道 中津街道』 豊前の街道をゆく会 2000